

表現する楽しさを味わう子の育成

～ I C T の効果的な活用を通して～

学校名 練馬区立中村西小学校

所在地 〒176-0023
東京都練馬区中村北4-17-1

ホームページ
アドレス www.nakamura-w-e.nerima-ky.ed.jp

1. はじめに

平成23年度から実施された学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力の育成」の一層の充実が強調された。説明するために自分の考えを整理して表現したり、表現された考えを受け止め考えを深めたりするなどの表現する学習活動は、思考力・判断力と密接に関係している。伝え合い、高め合う活動をよりよいものにするためにも、思考力・判断力・表現力を充実させ、生きる力の育成につなげていきたい。

練馬区では、平成22年から各校に1台ずつ電子黒板、実物投影機、ハイスピードカメラ等のICTが導入された。ICTには、児童の表現する意欲を高め、伝え合う力の育成の活性化を促すことが、先行研究で成果として報告されている。ただし、効果的に活用するためには、ICTの機能を知り、学習場面でどのように生かしていくかの理解を深め、授業改善を行っていくことが必要である。そこで、ICTを活用した授業改善を目指して研究を進めることを考えた。

当初は、電子黒板の活用を中心に据えて研究主題に迫ろうとした。しかし、研究の講師としてお迎えした玉川大学教職大学院教授である堀田龍也先生の助言もあり、児童に分かる授業を基盤とした表現力の育成を図るには、日常的に授業の中でICTを活用することが大事であることが分かった。また、一部の教師が先導する研究ではなく、全ての教師にとっての納得と有効性についての実感を積み重ねることこそが、真の授業改善につながることをご指導いただいた。そこで、全教室に実物投影機を配置し、電子黒板のみならず実物投影機やデジタルカメラなどの機器を活用した研究を進めていくこととし、平成23年度からは、副主題を「ICTの効果的な活用を通して」とした。

実物投影機を活用すると、「大きく見えて分かりやすい。」と、児童の声があがった。また、21年度までの校内研究では、表現力を高めるためには知識をしっかり身に付けることが必要であることが検証されている。そこで、1年目は、ICTを活用することで分かる授業を充実させることをめざした。2年目は、分かる授業の充実とともに、表現する授業を目指すこととした。分かったことを活用し、話し合いや発表等の言語活動を通じた表現活動を行うこととした。

2. 研究の目的

- 自分の考えをもち、伝え合う学習活動に向けた分かる授業の充実のためのICT活用について明らかにする。
- 児童が自分の考えを明確にし、伝え合う活動の充実を図ることで、思考力・判断力・表現力を育成する。

3. 研究の方法

- 研究主題にせまる2つのアプローチ
- その1 分かる授業の展開
 - (1) 実物投影機を活用し、大きく映す

- (2) ICTの効果的な活用
- (3) フラッシュ型教材、ドリル型教材の活用
- (4) 思考の視覚化による伝え合い活動
- (5) 映像資料・板書計画の充実

その2 表現する楽しさを味わう学習活動の充実

- (1) 発問の工夫
- (2) 場の設定の工夫
- (3) 学習展開の工夫

○研究主題にせまるための土台作り

話す機会を増やす日常的な取り組みの継続的指導
学級経営と授業規律を意識した授業作り

○研究を進める2つのステップ

ステップ1 分かる授業を目指す。

ICTを活用しよう。(分類 A B C E)

児童にしっかりと学習内容を習得させよう。

ステップ2 表現する楽しさを味わう学習活動の充実を図る。

伝え合う活動を充実させよう。

児童がICTを含めた表現方法を工夫できる授業にしよう。(分類D)

児童に伝え合う場が必要であることを感じさせる授業を展開しよう。

児童の伝え合う活動を評価し、価値付けよう。

ステップ1、2は階段を上がるのではない。どちらも授業の中であらわれるが、授業のねらいによって、どちらに重きを置き取り組むかが決まってくる。

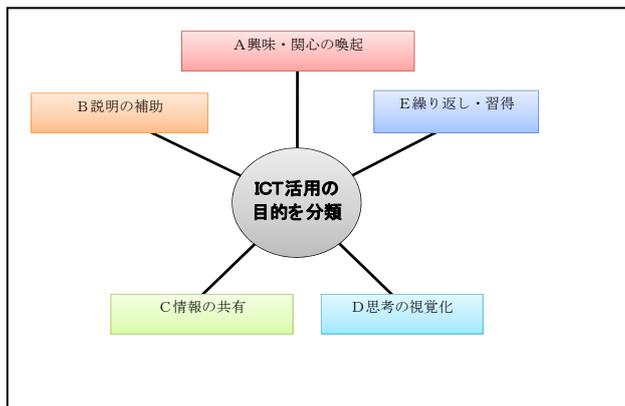
研究授業の時には、自分で、どちらに重きを置くかを考え、授業案を組み立てることとした。

4. 研究の内容

(1) 分かる授業を目指すICTを効果的に活用するために

① ICT活用の目的を分類

有効活用をするためには、ICT活用の際、はっきりとした目的意識をもつことが必要であることが分かった。そこで、主に実物投影機を使ったICT活用を授業の流れに沿って5つに分類した。この分類を行うことで、授業のどの場面で、どのような目的をもってICTを活用するか明確な意図をもって活用するようになってきた。



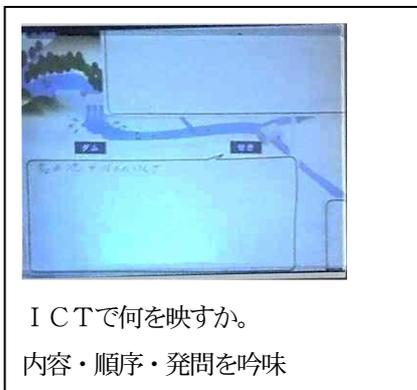
②学習指導案の工夫

ICT活用の際に、何を映すのか、その時になんと発問するのかを重視した。発問を精選し、それらを盛り込むために、指導案の枠を工夫した。

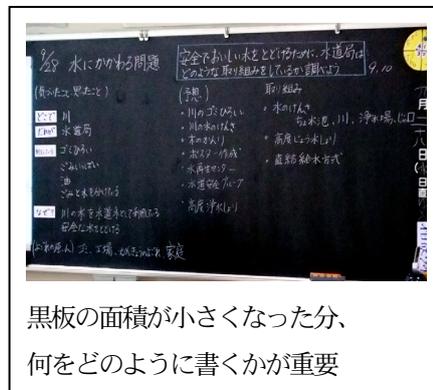
ICTの活用	
何の目的で？	★活用目的・方法「発問」
何を映すか？	★C情報の共有 ・実物投影機で、 前時の児童のノート を映し、前時を振り返り本時の学習につなげる。
何と発問するか？	「どんなことが分かって、どんな疑問がありましたか。」

③ICT活用と板書計画

実物投影機を活用した授業をしている上で課題となった点の1つに、「映したものが消えて行ってしまう」ということがある。そこで、何を映し、何を板書として残すか板書計画を明らかにするようにした。ICTを活用することで、板書の大切さを改めて感じるようになった。



ICTで何を映すか。
内容・順序・発問を吟味



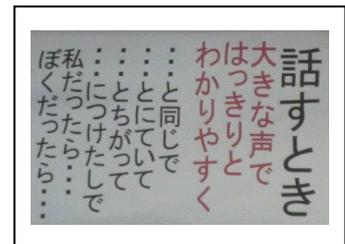
黒板の面積が小さくなった分、何をどのように書くかが重要

(2) 表現する授業をめざして

表現する場を意図的に設定し児童も実物投影機を使って、発表や説明を行うことで、何を伝えたいのか・何をどのように映したらいいのか・どのように書き表せば伝わりやすくなるのかを意識する様子が見られるようになってきた。

①発表の仕方を確認

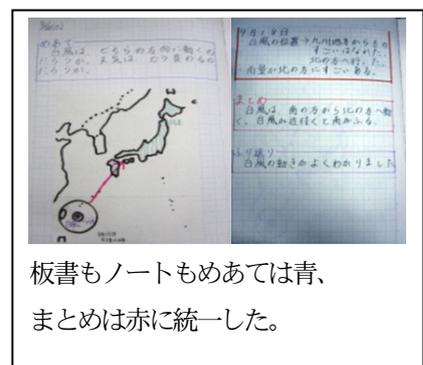
大きな声で分かりやすく話すことを全校共通の課題とし、発達段階に応じた指導の内容や掲示等について検討した。



②ノート指導

ICTで映し板書で残したものをどうノートに書かせていくか、また、自分の考えをどのように表していくかを意識した指導を行うようにした。実物投影機を使って、ノートをそのまま映し出すことが増え、さらにノートの大切さが確認された。

今年度は、めあてを青、まとめを赤でかくことを全校で統一した。



板書もノートもめあては青、まとめは赤に統一した。

③表現活動を意図的に行う

2人組や少人数グループによる話し合い活動を短い時間で多く取り入れるようにした。話す機会を増やすことで、どんどん話すようになっていった。

④児童もICT活用

説明や発表のために、児童にも実物投影機を活用させるようにした。



5. 研究の経過

研究が始まった頃：ランチルームに設置した電子黒板を活用した授業展開を模索する。

→有効活用には至らなかった。

22年度(1年目)：分かる授業を行うためのICT活用について研究を進める。

○実物投影機を全教室に配置

すぐに活用が始まる。まずは、使い慣れることから始まった。

○実践報告会

実物投影機を使った授業について全員が報告。どんな使い方ができるか、使い方研修にもつながった。

○ICTを活用した授業の展開を研究

ICT活用の目的を分類・指導案の工夫・板書の見直し。慣れるから活用へ。活用から有効活用へ。

○中間報告会

1年次の研究について発表を行った。

23年度(2年目)：表現する授業を充実させるために授業力の向上を図る。

○ICTを活用した分かる授業と言語活動の充実を目指した表現する授業

○研究発表会

2年間の研究の成果を発表した。

次年度にむけて：2年間の成果の定着と発展を目指す(ICTが「当たり前」となる授業)

○分かる授業・表現する授業の充実

○学習の土台となる学習規律を意識した授業作り

6. 研究の成果と今後の課題

表現する楽しさを味わう子として現れた姿

自分から実物投影機を活用して、発表をすることが多くなった。自分の考えや作品の工夫をみんなに聞いてもらいたいと意欲的に取り組む姿が見られる。

友達に伝えるために、どうしたら分かりやすくなるか、表現を工夫する様子が見られる。実物投影機を使う場合には、何を映したらよいか、どのように映したらよいかを考えている。

友達の考えを聞きたいという意欲が高まった。また、友達の考えを聞いてうなずいたり、ハンドサインで反応したりする等、よく聞いている様子が伝わる。

ペアや少人数による話し合い活動を活発に取り入れたことで、自分の思いや考えを言葉にして伝えることが日常的に行われるようになった。

分かる授業について（成果と課題）

ICTの活用について

- 説明に生かすことができ、効率良く学習を進めることができている。時間短縮につながり、話し合い活動や練習時間の確保につながった。
- フラッシュ型教材の活用やプレゼンテーションソフトの活用は、暗記する内容や用語の獲得など知識の定着につながった。
- 実験や道具の使い方や実習の手順など、確実に理解させたい場面で活用することで、児童の間違いなく進めることができた。
- 指導者がしっかりとした目的意識をもって活用しないと、大きく見えることに頼り過ぎてしまい、説明がおろそかになってしまうことがある。目的意識をもって活用するとともに児童の実態やそのときの状況を確認しながら授業を進めていきたい。

学習活動について

- ノートの使い方や黒板の見出しを確認したことで、児童が授業の流れを意識している。話し合いの場面への移行やまとめがスムーズに行えるようになっている。
- 全員が研究授業をしたことで、一人一人の授業力の向上につながるとともに、互いにより学習活動を取り入れ、授業を工夫することができた。
- 発問を精選し、よりスムーズに授業を進められるようにする必要がある。

表現する授業について（成果と課題）

- 学習形態の工夫をすることで、自分の考えを進んで話す姿が見られるようになった。ペアや少人数の中で話すことで自分の考えを言語化することができ、全体の場での発表につながるようになってきた。
- 意図的に発表する場を設定することで、話す機会が増え、なかなか話せなかった児童も全体の前で話せるようになってきた。
- 発問を工夫することで、児童がより表現することに意欲的に取り組めるようにしていきたい。
- 授業の組み立てを考え、日ごろから児童を鍛えていくことを意識した授業を行っていく必要がある。

7. おわりに

本校では、パナソニック教育財団の研究助成を校内のICT整備に充て、どの教室でも日常的にICTを活用した授業が行えるようになった。研究を始めるころは、「ICTって何?」「何をすればいいの?」と対処に困っていたが、実物投影機が全教室に常設されるとすぐに活用が広がり、研究の内容が深まっていった。

今では、ICTは授業にとどまらず、給食指導や生活指導、特別活動などでも大いに活用されている。

これらをふまえ、ICT活用をきっかけに3年目となる平成24年度は、分かる授業と表現する授業の充実と学校全体として学習規律の見直しや授業力の向上を目指すこととした。

学校生活の基盤となる学習規律や学習習慣の定着をすることで、授業への心構えを確かなものとし、その上で、学習内

容の習得（分かる授業）を目指す。さらに、習得した内容を活用し、伝えたり話し合ったりする（表現する授業）学び合いを意図的に設定していくで、学習内容を深めていくことをねらう。

2年間の研究を振り返った時に、ICT環境が決して十分とは言えない状況の普通の公立小学校の普通の先生たちが「もっとやってみたい」「どんなことができるだろう。」と前向きに研究に取り組んで行くことができたことが、成果を生んだ何よりの要因であった。それは、その時々私たちの段階に応じた、講師の堀田先生からのきめ細やかな指導があつてこのことである。どの教員も、自分が高まって来た実感と同時に納得できる次の課題の指摘を受けて、次の授業改善への意欲を掻き立てられてきた。最終的には、全員が研究授業を3本以上行って授業の力をつけたり、さらに周りの人から学んだりしていくことができたのである。

この研究の成果が学校の財産として定着し、さらなるステップアップの基盤となるようにしたいと考えている。そのことが、2年間の研究に伴走して下さったパナソニック教育財団と、講師の堀田龍也先生に報いることと考えて、今後も研究を進め学校としての力を高めていくつもりである。

参考文献

すべての子どもがわかる授業づくり—教室でICTを使おう—
高橋純 堀田龍也 編著 2009年 高陵社書店

わかる・できる授業づくりにICT活用を！

『文部科学省「教育の情報化に関する手引」に準拠した実践普及型「教科におけるICT活用パンフレット」の開発』
(研究代表者:堀田龍也)